

「心の目」

島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程 八年 岡野愛央

人を理解するために本当に必要なのは「心の目」だと私は思います。私が暮らす松江にゆかりのある明治の文豪・小泉八雲の生き方と、自分の経験を重ね合わせると、その思いは一層確かなものになります。

小泉八雲は外国から日本へやってきて、最初に松江で暮らしました。英語教師として若者に教える傍ら、日本の日常や風習の中に美しさを見だし、数多くの物語を残しました。しかし彼の人生は決して平坦なものではありませんでした。幼い頃の事故で片目を失明し、もう片方の目も弱視だったことから、人の顔をまっすぐ見ることが難しかったのです。そのために、人の視線や言葉に傷つき、不安や孤独を抱えたこともきっとあったはずです。

それでも八雲は、人の「外見」ではなく人の「心」を「心の目」で見つめました。松江で日本人の妻セツや周囲の人々に支えられる中で安らぎを得て、異国での孤独を乗り越えていきました。家族の団らんや雪に包まれた静かな夜、隣近所の助け合い、おばあさんの無私の心を「心の目」で見つめ、世界に伝えました。外見や国籍の違いを越えて、人は心でつながることができる。八雲の生涯はその証でした。

私はこのことを知ったとき、脳裏に自分自身の体験が蘇りました。小学校入学の時、私は視力が落ちて眼鏡をかけることになりました。友達からすごくからかわれたというわけではありません。ただ、自分の心の中に「私はみんなと違う」という気持ちが雨雲のように広がっていき、恥ずかしさや不安で胸がいっぱいになったのです。その気持ちに自分自身が押しつぶされて、結局、私が学校で眼鏡をかける勇気を持つことはありませんでした。

そして私は、ぼやけた世界の中にたたずんでいました。授業中に黒板を見ると、先生の書く文字はただの影にしか見えず、友達的笑顔さえも霞んで見えていました。先生が何を書いたのかを「たぶん、こうだろう」と勘で想像しながら授業を受けました。黒板が見えないために授業の内容がよくわからないとき胸の中に小石が一つずつ積もっていくような気持ちになりました。勉強が嫌いになったのではありません。ただ、自分自身の中にあった「違いを認められない心」が、私から「自由に学ぶ権利」を奪っていたのです。

高学年になってコンタクトレンズをつけるようになり、世界は一変しました。黒板の文字がはっきりと読める瞬間、遠くから飛んでくるバレーボールがはっきりと見える瞬間、まるで暗い海の底から光の射す水面に浮かび上がったような感覚がしました。「見える」ということが、こんなにも安心を与え、心を強くするのかと驚きました。けれど同時に、私は後悔しました。この数年間、私は自分を認められなかったせいで、自分の学ぶ権利を自分自身の手で奪ってしまっていたのです。

その時、人権とは、誰かに守られるだけのものではなく、自分が自分を受け入れることでもあると、初めて気づきました。「眼鏡をかけている」という小さな違いを恥ずかしいと思う気持ちが、自分自身から自由を奪っていたのです。もし、そのままの自分を認める勇気が

あれば、もっと早く視界は開けていたはずなのに。

小泉八雲もまた、失明や孤独という壁を抱えていました。しかし彼はその壁を力に変え「心の目」で人を見つめました。彼が日本で受け入れられたのは、妻セツや周囲の人々が八雲を受け入れた一方、八雲自身も「自分の違い」を受け入れることで、周囲の人々と自分自身のどちらもリスペクトすることができたからだと思います。もし彼が自分を否定したまま心を閉ざしていたなら、美しい日本の物語が世界に伝わることはなかったでしょう。

私の小さな体験と八雲の生涯は、時代を越えてつながっています。人が人を受け入れるかどうか、自分が自分を受け入れるかどうかで、人の未来は大きく変わります。だから私は、友達のちょっとした違いにポジティブな言葉をかけていくのと同時に、自分自身の中の「違い」も否定せず、ありのままに受け止めていきたいです。そうすることで、自分も含めた誰もが安心して自分らしくいれる教室になるのではないかと思うから。

世界では今も、国籍や文化の違いを理由に争いが絶えません。しかし八雲が教えてくれるのは、「違い」とは分断ではなく、理解への入口だということです。人権とは、誰もが自分らしく生きられるように、互いを尊重すること。そして自分自身をも大切にすること。その始まりは、一人ひとりの「心の目」です。

私はこれからも「心の目」で人と向き合い、そして自分自身を含めたみんなを認めていたいと思います。ぼやけて、もやもやとした景色が目映る黒板の前で感じた、もやもやした気持ちを、誰にも味わわせないために。小さな教室から広がる優しさは、やがて世界を変える力になると信じています。